

高齢者のソーシャル・サポートに関する探索的研究

— 個別面接データから —

中 島 千 織¹⁾

【問題と目的】

超高齢社会に向かいつつある現在、高齢者の精神的健康に関する研究が盛んに行われている。その中で、高齢者が上手く、楽しく、充実した暮らしを送ることができるか否かは、第一には本人によるが、高齢になればなるほど他者による支えの必要性が増してくる(高橋・波多野, 1980)とも言われている。高齢者の対人関係に関する研究においては、ソーシャル・ネットワークやソーシャル・サポートと、精神的健康や適応との関連について扱った研究が多く見られる(例えば、河合・下仲, 1990; 玉野, 1991)。また、ソーシャル・ネットワークや、その中での支援のやりとりであるソーシャル・サポートが主観的幸福感に影響を及ぼすことも指摘されている(例えば、古谷野, 1984; 前田・野口・玉野・中谷・坂田・Liang, 1989; 野口, 1991)。高橋・波多野(1990)が述べる他者の支えとは、個人をとりまくネットワークの中で行われるサポートのやりとりを指していると考えられることから、ここでは特にソーシャル・サポートについて取り上げる。

これまでの研究では、高齢者が受領するサポートが中心とされてきた。しかし近年、高齢者が受領するサポートは、主観的幸福感に対する正の影響以外に、高齢者に与える負の影響があることも指摘されてきている。例えば、Stoller(1985)は、高齢者を対象とした調査から、サポートのやりとりができないことが高齢者のモラルに大きな負の影響を及ぼすことを指摘しており、水嶋(1998)は、援助を受けることで結果的に不快感を覚える援助が存在する可能性を述べている。さらに蜂屋(2000)は、「受け手にとってその援助がどのような心理的意味合いを持っているかを十分に考慮した上で実施されないと助けるどころか逆に受け手をひどく傷つけていることがしばしばある」と述べ、「人はソーシャル・サ

ポートを受けることによって大事な物を失っているのではないか」と指摘している。

また、Langer(1983)は、何から何まで世話されることは自尊心の低下につながると指摘している。サポートの受領は、「支え」という意味において高齢者のモラルと正の関連がある一方で、このように高齢者の自尊心を低めたり、高齢者の精神的健康と負の関連をしているという指摘がなされている。ソーシャル・サポートに関連した研究における結果が一致しない理由についてConner, Power, & Bultena(1979)は、測定法の違いや他の要因の影響といった理由を指摘した上で、ソーシャル・サポート研究においてその意義や重要性についての被験者自身の認識を顕在化させることも必要であると述べている。また、このような視点に立つと、相手がサポートを意図して行った行動であっても、受け手にとっては脅威となりうる可能性があることが推測できる。つまり、与え手が何を提供しているかよりも、受け手の認知が重要であると考えられる。これらのことから、高齢者自身のサポートに対する認識についても取り上げていく必要があるのではないだろうか。しかし、ソーシャル・サポートを受領することを、高齢者自身が実際にはどのように捉えているのかという点については、これまで詳しく検討されていない。高齢者に対するサポートを考えていくためには、高齢者がサポートの受領自体をどのように捉えているのか、あるいはどのような部分から負の影響を受けうる可能性があるのかという点について、高齢者自身の視点も含めた上で検討していく必要があると考えられる。

最近では、高齢者から提供するサポートという視点からの研究もいくつか行われてきている。金・杉澤・岡林・深谷・柴田(1999)は、高齢者に対する縦断的調査から、ソーシャル・サポートと生活満足度との関連を検討し、女性において提供するソーシャル・サポートと生活満足度との間に有意な相関を見いだしている。また、Erikson, Erikson, & Kivnik(1990)は、80歳以上の高齢者への面接から、「助けてやれるのが喜びなのであ

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程(後期課程)

る」と述べ、高齢者が必要とされ感謝される役割を演じる機会を喜んでいる例などを示している。これらの記述は、高齢者がサポートの「提供」をすることが肯定的な意味を持ちうる可能性を示しているのではないだろうか。

しかし、ここにおいても、高齢者自身が、サポートの提供自体をどのように捉えているのか、その実態については詳しく述べられていない。しかし、高齢者に対する総合的なサポートのあり方を考えていく上で、サポートの提供が高齢者にとって、どのような意味を持ちうるのかという点について、高齢者自身の視点から検討し把握していくことは、重要な視点であると考えられる。また、社会的な役割を持つこともサポートの提供の一種であると考えられることから、社会的役割についても、検討したいと考える。

これらのことから本研究では、高齢者にとって実際に行われているサポートの提供と受領について、その内容、そしてそれらに対する認識を取り上げ、面接法を用いて探索的に検討することを目的とする。

【方法】

1. 対象

名古屋市内の福祉会館を利用している65歳以上の男女30名（男性：12名、女性：18名）。会話能力には問題のない高齢者であり、年齢範囲は65歳から89歳まで、平均年齢は75.3歳（SD = 6.78）であった。なお男女間において、年齢、尺度得点、回答内容等に大きな差が見られなかったことから、今回は男女を区別せずに検討を行った。

2. 手続き

はじめに、研究の主旨、秘密の厳守、強制ではないこと、テープを取ること、について文面とともに口頭で説明し、了承を得た。また、被験者には回答したくない質

問については回答しなくても良い旨を伝えた。

面接場所は名古屋市内の福祉会館内で、個別面接方式で行われた。面接時間は個々により異なったが、20分から1時間程度、平均で30分程度であった。

3. 面接内容

①個人的属性

年齢、性別、家族構成、学歴（教育年数）、職歴、家族構成についてたずねた。

②現在の対人関係の中での親しい人、大切だと思う人（対人関係を具体的にイメージしてもらうために尋ねる）

普段生活している中で、大切だと思う人、親しいと思う人をたずねた。

③サポートの提供と受領に対する認識

②の中で普段行っているサポートの提供や受領について半構造的に回答を求めた。

④社会的役割

社会的にまかされている役割や仕事の有無とその内容についてたずねた（非営利的な活動に限定）。

【結果と考察】

サポートの提供と受領について

サポートの提供と受領に関しては、サポート提供（受領）の有無、内容、サポートの提供（受領）自体をどのように感じているか、について半構造的に回答を求めた。

サポートを提供（受領）することについてどのように感じているかに関しては、回答を、肯定的な感情を含む回答（以下「POSITIVE」）、否定的な感情を含む回答（以下「NEGATIVE」）、肯定的でも否定的でもなく事実をありのままに受け入れている回答（以下「NEUTRAL」）の3つに大きく分類できると考えられた。以下ではこの3つの分類基準をもとに分類を行った上で検討を進めることとした。

Table 1 提供に関する回答の具体例

提供の有無	分類	具体例	人数
あり	POSITIVE	<ul style="list-style-type: none"> 人の面倒を見るのが好き。（中略）おじいさんには昔から「世話しすぎ」と言われた。 世話好きの方でしょうね。好きかもわかりませんよ。 どっちかっていうと、してあげる方が多いわね。してあげるってこと、うれしいもの。してもらうより、あげる方がうれしいにそりゃきまっとるがね。 自分も満足で、喜んでもらえればそれもうれしい。 	19
	NEUTRAL	<ul style="list-style-type: none"> できる範囲でね。 	4
	NEGATIVE	（該当者なし）	0
なし		<ul style="list-style-type: none"> ないです。 	7

1. 提供について

分類の結果、サポートの提供については特に POSITIVE な回答が多く見られたが、NEGATIVE な回答は見られなかった (Table 1)。このような結果は、高齢者が提供するサポートが高齢者にとって好ましいものであるとしているこれまでの研究結果と一致していると思われる (例えば、蜂屋, 2000)。

さらに、その内容に着目すると、POSITIVE な回答の中で「世話好きである」「人にしてもらいよりもしてあげの方がうれしい」を初めとして、「好きだから」「気分がいいから」というような回答がみられた。このような回答は、提供することが満足感や自尊心に影響を及ぼす可能性を示唆していると考えられる。

またそれ以外には、「やって欲しいと思ってもらえないと腹が立つので、自分でした方がいい」という回答もみられた。人からの援助を期待することは、それが裏切られたときにショックを受けたり傷ついたりすることを含んでいる。そのため、そのようなショックや裏切りによって傷つくことを避けるために、はじめから他者には期待を持たず、自分でやることにしようという防衛的な態度の現れであるように思われる。

2. 受領について

受領するサポートについてその内訳を見てみると、提供とは逆に、受領においては NEGATIVE な回答が多く、「してもらいようなことは何もない」という回答も多いことが特徴としてあげられる (Table 2 : 分類不能の1名を除く)。また、「お互い様だから」といった NEUTRAL な回答も多く見られ、POSITIVE な回答は見られなかった。つまり、人から手助けをしてもらうということが、高齢者にとって好ましくないものとしてとらえられることが多いと考えられるのではないだろうか。

また、回答の内容に着目してみると、まず、人の世話

になりたくないという言及がみられた。例えば、「役に立たないけど、迷惑かけないだけいい。」という言及や、あるいは現在のことでないが、面接の中で「世話をかけるようになったときがね、そのときが怖い。それが心配。」といった言及がみられた。ここには、周囲に世話をかけることへの恐怖感、人に依存することへの恐れがあらわれているように感じられる。他にも、面接の中で「(主人と)二人で粗大ゴミだけにはならないようにしようねって言っているんです」といった女性もいた。「粗大ゴミ」という表現には、これまで社会人として、あるいは主婦として、役割を担ってきた人々が、高齢になるにつれて役割を喪失することによって、「価値のない人間」になることへの恐れがあらわれているのではないだろうか。これらのことから、サポートを受領することによって自尊心をはじめとした精神的な健康の低下といった問題が存在する可能性が示されていると言えよう。

さらに、「人を頼りにしてはいかん。裏切られたとき腹が立つから。困ったときほど、人、親戚なんかは頼ってはいけない。やってくれるという先入観があるから。(中略) 100%信用することはあり得ない。自分が打撃を受けるから。」といった言及も見られた。この言及からは、提供に関する回答にも見られたように、人を頼りにして裏切られたときのショックを仮定して、人に頼ることを避けるという対人行動を取ることによって、自分自身を防衛している姿勢が見て取れるのではないだろうか。

人に世話になることによって精神的な健康が低下するという問題とは別に、このような、対人関係内での葛藤や摩擦を回避するためにサポート受領を自ら避けるように行動するという高齢者の姿は、これまであまり捉えられてこなかったのではないだろうか。そのような高齢者がサポートを受けることが、高齢者にどのような影響を及ぼすのかといった点については、今後検討していく必要があるのではないだろうか。

Table 2 受領に対する回答の具体例

受領の有無	分類	具体例	人数
あり	POSITIVE	(該当者なし)	0
	NEUTRAL	・相互でお互いに助け合わないといけないから。 ・役には立たないけど、迷惑かけないだけ良い。	7
	NEGATIVE	・(やってもらうことは) あるけど、あんまりそういうのはうれしくない。 ・あんまりして欲しくないね。自立心が旺盛だから。 ・人にしてもらいのは、嫌いな。	8
なし	・してあげることもしてもらいこともない。	14	

社会的役割について

現在の社会的役割の有無を尋ねた結果、その内容は老人会やサークルなどの「役員」、あるいは、人形作りを教えるなどといった「教授」の2つであった。これらについて整理した結果、「あり」が19名（うち、「役員」17名、「教授」2名）、「なし」が11名であった。

また、社会的役割が果たす機能を明らかにするために、回答内容を検討したところ（具体例を Table 3 に示す）、「発表会があって、そう言うことで喜んでもらえれば、わたしもうれしい『ご苦労様でした』と言われればうれしいし。」「頼まれて行事なんかで教えてくれと言われるのが楽しみ」などといった回答がみられた。老人会の役員については、地方自治体と会員との板挟みになることへの不満について述べられた方もあったが、役員や人に教えていることなどの仕事自体を否定的に捉えている回答はみられなかった。

また、普段の対人関係の中でも提供を行って、社会的な役割も行っているという人だけではなく、普段の対人関係に関するサポートの提供や受領はないと回答していても、社会的役割については「ある」と回答する場合も見られた。その場合にも、活動を「楽しみ」として受け取っており、その活動自体をとっても楽しんで行っていた。このようなことから、フォーマルな場でのサポートの提供としての社会的役割が、普段の対人関係の中で行われるサポートの提供とは別なものとして行われていることがわかる。このようなフォーマルなサポートについても検討していく必要があろう。

【全体的考察】

今回の研究では、高齢者自身が、サポートのやりとりについて実際にはどのようにとらえているのかという点について検討した。サポートの提供については、実際にサポートの提供を行っていると回答した人がほとんどであった。その中でもサポートの提供をどのようにとらえているかを POSITIVE、NEGATIVE、NEUTRAL

に分類した。さらに POSITIVE な回答について詳しく検討したところ、「気分がいい」「してあげ方がうれしい」といった言及がみられた。これらの言及は、サポートを提供することによる満足感や自尊心などに関わる言及であると考えられる。このことは、サポートの提供が高齢者の精神的健康と関連しているというこれまでの研究結果と一致した結果が得られたといえよう。また、社会的役割が普段の対人関係とは異なる場面で行われていることや、高齢者が社会的役割を果たすことから楽しみや喜びを見いだしているという結果が得られた。このことから、普段の対人関係といったインフォーマルなサポートだけではなく、フォーマルなサポートについても着目し、検討していく必要があるのではないだろうか。

また、サポートの受領についてもこれまでの研究結果と一致して、すべての人が受領を好ましく思っているわけではなく、「ない」という回答も多くみられた。質問方法についても検討する必要があると思われるが、やはりそこには、サポートを受領することへの拒否的な態度があらわれているように思われる。さらに、回答内容を検討したところ、人からの援助はうれしい反面、迷惑をかけてしまうのではないかと、世話をかけているのではないかといった、相手への気兼ねが存在しているように思われた。また、粗大ゴミにはなりたくない、といった言及には、加齢に伴って仕事や主婦役割と言った役割感が失われたことが関連しているとも考えられる。これらのことは高齢者がサポートを受けることによって自尊心が傷つけられる可能性を示唆しているとも思われる。この点については Langer (1983) の指摘と一致していると思われる。加齢に伴う様々な役割の喪失といった視点も含めて検討していくことも今後の課題であると思われる。

さらに、提供・受領の両方に共通して、相手に裏切られることや傷つくことを恐れる回答が見られた。そのように裏切られたり傷ついたりすることに対する防衛の手段として、自ら対人関係を規制し、親密な関係を拒否している可能性も考えられるのではないだろうか。また今

Table 3 社会的役割に関する回答の具体例

役員	<ul style="list-style-type: none"> ・(会の役員) この間も発表会があって、そう言うことで喜んでもらえれば、わたしもうれしい。「ご苦労様でした」と言われればうれしい。 ・(会の役員など) 色々な役職もやっているが、やらないと退屈なので、やっていた方がいい。(中略: 小学校同窓会の世話役などもやっていて) それで助かっていると思ってくれる人もいる。 ・年寄りの会などでは、間に合うから、やってくれとは言われるけど。(中略) ボランティアだと思ってやらないと。人が喜んでくれるから、それが自分も喜びだと思って考えなくては。
教授	<ul style="list-style-type: none"> ・ま、楽しみだけ。(中略) 頼まれて行事なんかで教えてくれと言われるのが楽しみ。

回は、サポートの提供や受領について、高齢者が実際の場面でどのようにとらえているかを調べるため、実際にサポートが「ある」と回答した場合に限定して検討し、「ない」と回答した場合にはそれをどのようにとらえているかという点には着目しなかった。そのため実際には、上記のような理由でサポートのやりとりを拒否している例も考えられることから、このような理由で関係を拒否している可能性についても検討していく必要がある。今後、高齢者に対するサポートを考えていく上では、以上のような視点をふまえ、高齢者の対人関係が精神的健康などの側面とどのように関連しているのかについて、さらに検討していくことが必要であろう。

参 考 文 献

- Conner, K. A., Power, E. A. & Bultena, G. L. 1979 Social interaction and life satisfaction: An empirical assesment of late-life patterns. *Journal of Gerontology*, 34, 116-121.
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnik, H. Q. 1990 老年期：生き生きしたかかわりあい（朝長正徳・朝長梨枝子，訳）東京：みすず書房（Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnik, H. Q. 1988 *Vital involvement in old age*. New York: W. W. Norton Company.）
- 蜂屋良彦. 2000 ソーシャル・サポートと適応 五十周年記念論集（神戸大学文学部），125-144.
- 河合千恵子・下仲順子 1990 老年期における家族：老人とその配偶者，子世代，孫世代の対人関係についての心理学的アプローチ 社会老年学, 31, 12-21.
- 金 恵京・杉澤秀博・岡林秀樹・深谷太郎・柴田 博 1999 高齢者のソーシャル・サポートと生活満足度に関する縦断研究 日本公衆衛生誌, 46 (7),

- 532-541.
- 小嶋秀夫 1997 幼児・児童の社会的支援体制に関する心理・生態学的研究 平成7年度・8年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書
- 古谷野巨 1984 主観的幸福感の測定と要因分析：尺度の選択が要因分析におよぼす影響について 社会老年学, 20, 59-64.
- Langer, E. J. 1983 *The psychology of control*. London: Sage Publication.
- 前田大作・浅野 仁・谷口和江 1979 老人の主観的幸福感の研究—モラール・スケールによる測定を試み— 社会老年学, 11, 15-31.
- 前田大作・野口裕二・玉野和志・中谷陽明・坂田周一・Jersey Liang 1989 高齢者の主観的幸福感の構造と要因 社会老年学, 30, 3-16.
- 水嶋陽子 1998 高齢女性と選択的親子関係 家族社会学研究, 10 (2), 83-94.
- 野口裕二 1991 高齢者のソーシャル・サポート：その概念と測定 社会老年学, 34, 37-48.
- Stoller, E. P. 1985 Exchange patterns in the informal support networks of the elderly: The impact of reciprocity on morale. *Journal of Marriage and family*, May, 335-342.
- 高橋恵子・波多野誼余夫 1990 生涯発達心理学 東京：岩波書店
- 玉野和志 1991 団地居住老人の社会的ネットワーク 社会老年学, 32, 29-39.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
(2000年9月16日 受稿)

【付 記】

本稿は平成9年度名古屋大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。

ABSTRACT

An Exploratory Study of Social Support in Elderly People : An Interview Study

Chiori NAKASHIMA

This paper reports on an exploration of social support in elderly people. Twelve males and eighteen females, with a mean age of 75.3 years, participated in individual interviews. The main results were as follows: (1) Perception by the sample of the level of support that they provided for others was classified as positive, negative, or neutral. There was no one in the negative group. (2) Perception by the sample of the level of support that they received from others was classified as positive, negative, or neutral. There was no one in the positive group. (3) Of the 17 elderly people in the sample who had social roles at the time of the interviews, all the 17 perceived these roles as positive.

Key word : elderly people, social support, interview